

ドヤ財閥 山田一族の 伝説と現実

特集・千成火事 その四

伝統に生きる 「がめついい奴」たち

「がめついい奴」の
はじまり

昭和三四年頃、三益愛子、中山千夏、榎本健一らが出演して非常に話題になった芝居で「がめついい奴」というのがある。すでに政人となつて菊田一夫の作で、同年代の金ヶ崎を舞台にした銀亡者たちの話だが、芝居としては大記録の二一万人もの観客を動員し、すぐ東宝で映画化されている。今ではよく使われる「がめついい」という言葉も、この芝居から世間一般に登場したのである。

—— 約六〇万のドヤ「金ヶ崎荘」を経営するお鹿はあさんは、かつて金ヶ崎の大地主であつた小山田家の女中で、この世では金が一番だど悟つてから、がめつつかせいでため込んだ三千万円を榎千のカメに隠している。戦後の変動で小山田家はおちぶれ、元女中のお鹿はその小山田家の土地に金ヶ崎荘を建て、自分のものにしてしまふ。今では金ヶ崎荘の住民になりホルモン屋の屋台を出す小山田家の娘は、土地をお鹿はあさんからとり返そうと必死になるが、それにつけてこんな男を殺してしまふ。

ある日東京からお鹿の義弟と称する男がきて、三千万円の入つて榎千のカメを盗もうと

するが、お鹿が可愛がる親児テコの機転で失敗する。やがて金ヶ崎村はとりこわしになり、そこでも立退料をたんまりせしめたお鹿は、乞食をしながらひおも金持ちになることに熱中するのである。お鹿はあさんの「がめつさ」、あくなく金銭欲をのべて展開されるこの芝居は、二で幕となる。

お鹿はあさんは、芝居の中で「物をひろえ」と言う。それが銭もうけの才一歩であるという精神は、お鹿はあさんに一貫したものだ。もろん、資本なしでやれるのだから銭もうけの効率が一番良いのはいうまでもない。

お鹿はあさんとは誰か

話を実際の、戦前の金ヶ崎に戻そう。

このお鹿はあさんのモデルといわれている山田志げという明治三三年生まれ（現在五十）のおはあさんがいる。このお志げはあさんは、山田一族の元祖的存在で、愛隣綜合センター向いにある宝ホテルの経営者であることは前

記したが、今も宝ホテルに住んでおり、住民登録もしている。白髪の温和そうなおはあさんだ。しかし、この人にはつるるる話題は多くしかもそれらは実に驚くべきものである。のど。

戦前のドヤは、今とは違って、木造二階建瓦葺道りていこのものはかりで、それぞれの部屋の前まで土足で上がれるようになっていた。宿泊人も今のように労働者ばかりではない。乾物、新芝居とかいった行商人なども多く利用するいわゆる「本宿」で、各部屋の前の廊下には、その行商の道具とか自炊用のカンテキなどを置いていたのである。

こんな時代からお志げはあさんは活躍した。まだまだお志げおはあさんの時代だ。このお志げおはあさん、実にいろいろな物を拾いまくったのである。

この特集のため取材中特選にもめぐりあえた、山田一族のドヤの管理人（帳場）をしていくさんに聞いた話のうち有名な話を二つ。

拾ったものをやる

何処ひろったか？　まずト口箱。魚屋の店先につんである魚を入れる両側にヒモのついた。あの底の浅い箱である。当時のドヤで自炊する連中に、それをバラしてマキにして、一たけいくらで売りつけたのである。もちろん、他の木箱でも良いが、ト口箱の方が簡単に手に入っただけだし、

そして戦後、おむけおばさんはまたひろった。

金ヶ崎はほとんど戦災を免れ、そのまま残っていたが、大きく変わっただのは府道尼平線（センター前の直い道）にはアベノの方からうすうすと金ヶ崎までヤミ市が並んだ、ちょうど今の市大病院の向いの方にある舞台がヤミ市風で面白いが、ああいうのがもっと建てこんで並んでいる風景を想像してほしい。

ヤミ市のまわりには当然「女」が立った。いわゆる「青稈」が茶白山から篠田近辺まで

あちこちでできたのである。そこでの必需品は、今ではもう言わないが、衛生サック、フマリゴム製品。

天王寺公園までいかずとも、そこいらのゴミ箱を探せば、使いたてのホヤホヤがいくらかでも手に入っただけという。これに目を付けたおむけおばさん、拾いあつめてきれいに洗ってかわかした。それにテンカファンをポンポンはたいてすの方からクルクル巻き直し、紙で包めば立派な商品ができあがり、またそんな商品が通用する時代であり場所柄でもあった。おむけおばさんはこの再生ゴム製品を少々値引きして女連に売りつけ、小金をためていたのである。この再生ゴム製品の話は、芝居「がめつり奴」では登場しないが、映画化されたものには天王寺公園を背景として登場するのである。

◆ 一六ページ「実権者は伊太郎さん」
（写真ページのあと）につづく。

(一四ページからのつづき)

裏権者は伊太郎さん

旧町名で申し訳ないが、東枝町四五〇三に二階建ての共同住宅を持つてゐる山田清吉という人がある。法務局へ行つてこの共同住宅の登記簿を調べてみると、清吉は昭和三十七年一月十三日に、この住宅を抵当にして、池田・志津・タカ(各山田姓)の三人から二百十万円の金を借りてゐる。この四人の關係は定かではないが、親族關係にあることは間違いない。この四人のうちタカは明治四十二年生まれのおばあさんで、この亭主が山田一族の現在の裏権を握つてゐる伊太郎である。伊太郎は明治三十五年生まれで、お池田あさんとも年は近く、いとこであるという話も聞くが、二人の關係も明らかになつていない。

伊太郎は妻タカとの間に、千成ホテルの経営者である博美・博文兄弟、そして若津子(三人の子供)一族の中で重要な役割を果たして

いる裏権があり、名前からして兄弟らしいが正確な關係は不明である。

伊太郎の住居をみると、本籍地は山王三丁目五八番地になつており、ここは新開橋商店街(パチンコ)ニュー大阪からアバノハ上る商店街)にある「ホテル春日」が建つてゐる。ここで伊太郎が生まれたかどうかは別にしても、実力者伊太郎の今日の基盤となつたのがこの「春日ホテル」なのである。

「春日ホテル」は他のホテルとは違つて、連れ込みホテル風だが、これは「春日ホテル」の伝説ともいえるものだ。

戦前からこのあたりに住み、近所で雑貨屋を営むYさんの話はこうである。

「終戦直後のこのあたりはヤミ市の關係で母の女の業みたいになつてましたなあ。当時の春日は今みたいな隆盛のええもんやうて、ちょうどパラッパミみたいなもんでした。だが何人もありましてなあ、ほれ、連れ込んで、バツとめくつたらもうでさる、

座敷とんちを賣かうんですが、あれみたになつてやつてましたなあ。」

興生山洋服店を立つたお池田あさんも、伊太郎さんともちつとたれつて、春日あじりを重視的に売りさばつていたのかも知れない。

洋服屋からヤミの多角もくけり

着々と不動産をぶちやしていつに伊太郎は、自ら代表取締役となつて、昭和三十二年七月、株式会社山田産業を設立した。資本金百三十万円。取締役はタカ・博文・博美、監査役が若津子という文字通りの同族会社なのである。しかし、伊太郎は昨年の四月に代表取締役を辞任しており、形式的には山田産業とは關係がなくなつた。

この会社の登記簿上の目的は、一、洋服和洋雑貨裝飾品の製造販売、二、旅館及び下宿の経営、とそれに付帯する一切の業務、となつてゐる。

ボヤ主が洋服?といえは不思議に思ふかも

知れないが、これこそ山田一族の多角的经营を端的に示すものである。

洋服屋で判明してゐるのは、龍田本通商店街の北入口の方にある「キンバト洋服店」と「ロサン洋服店」の二つだ。そして博文の責任になつてゐる「ロサン洋服店」は千成火事の直後から、都合により閉店になつて、こゝにボヤが燃えると洋服屋が閉まることになるらしい。奇々怪々。

ちなみに四七年版「町を明るくする会」の会員名簿の龍田本通商店会のところを見ると、アーカード保存部に「ロサン」として博文が、相談役に「キンバト」として若津(山田産業の役員にはなつていないが、顧問に「ロサン」として伊太郎がそれぞれ名を連ねてゐる。これを見ると一族は龍田本通商店会で大きな位置を占めてゐることもわかる。

伊太郎は他にも有限会社ビジネスホテルの代表取締役になつており、龍田本通の一本線路のすぐ西にあるクランホテルともう一

フドヤを持ついわば地方名士なのである。クランドホテルの西隣にあるホテル「宝山」の所に「山田伊太郎」という表札が掛かっているが、ここは博文の所有であり、一族で三十一人釜ヶ崎近辺に住む博文の住居なのである。

かれらの収入は

こんなにある

二つの会社の社長さんであり、高級洋服店、ドヤも持つ伊太郎の収入はどんなものだろうか。

東京商工興信所が出す「日本高額所得者名簿」へ長者番付のことで「この厚い本を調べると、所得の申告額は四七年で一千五百七十七万七千円、四八年で、一千八百九十九万九千円とばっている。

これはあくまで所得税の対象額ということだから、実収入はもっと少ないものになってしまう。伊太郎の実収入がこんなに少ないものであるはずがない。裏を明かせば、個人経

営で事業をやると税金は高く、会社経営という形にして、そこから給料をもらうという形にすれば税金は安く済む。それに社長さんといえども税法上は勤労者といふことらしいから、それなりの税の負担もあるのである。

税金にくわしい人に聞いてみると「どうせ会社から十萬か二十萬の月給をもらってこれにしているんやろ」ということであつた。とりわけ山田産業は、文字通り同族会社であり、給料以外の収入は全部会社の収入ということになる以上、かなりの額の金が、実業伊太郎たちのフトコロに入つてゐる計算になる。それは息子の博美・博文についても同じことなのである。博美は四七年は一千五百二十万三千円、四八年で一千四百三十八万六千円。博文は四七年に一千三十二万一千円、四八年は記載なしである。また博美は一番多く四七年に二千一百一十三万一千円、四八年で二千二百九十五万一千円とばっている。

個人経営と会社経営をうまく併用して、所

得の申告は四七、四八年のものにしてゐるのが、彼らなのである。

トコロ高田家

飛田商店街近辺で彼らのことについて調査してみると、あにはからんや、近所同会のよしみというものだろうが、それほど悪く言う人はいなかった。

しかし、一つだけ面白い話を聞くことができたのだ。

「あの人（伊太郎のこと）ねえ、昔（むかし）がイヤはつてね、どういうわけかその差（さ）さんと本妻さんが仲が良うてね、となり同（な）居（ぐ）んでゐるんよ、けつてい（けつ）な家（け）やうて評判ですわ。」

「ケラケラ笑い、すぐそのあとで余計なことじゃあつてしまつてと思つたのか、「私がしゃべつたなんてこと絶対にわからんようにしていてね」と言い残し、そそくさと家の中に引込んでしまつた。このおばさん、年は四十四、五才で西成区民ということだけ書い

ておこう。

山田（おたけ）さん×一番の旦那様

山田一族の中で一番頭が良いといわれているのがこの男である。この男、山田一族の直系ではないが、伊太郎親子と何かしらの血縁関係があることは、山田一族のドヤの元管理人をしたことのある前出Kさんの話だから間違いない。

治は昭和六年七月の生まれで四三才と男盛りの年である。伊太郎の弟の健治郎の息子で千成所有者の博美博文とはいひにこになる。妻和子との間に一男二女の子供がいる。治は新橋本館、新橋別館、新大阪、五反田の和子がキントともう一軒、つまり夫婦で五野もの大さなドヤを持つてゐる。

これだけのドヤを持ちながら、治も和子も高額所得者名簿には載を出していない。世からこそ頭が良いといわれるゆえんなのである。彼のがめつこは一族でも群を抜いていて、一族の中でも反発をくらつてゐるというつわも

のなのである。

伊太郎と同じで、この人は「山治株式会社」を、資本金七〇万円で昭和三八年二月に設立しているのである。もちろん社長は泊本人、取締役にはまず本人が重任、そして和子、そして、高林襄という人物が顔をつらなっている。「山治株式会社」の登記簿上の目的は単に明解で、簡易宿泊所の経営、管理、およびこれに付帯する一切の業務となつてゐる。つまり、この夫婦のドヤを経営する会社のサラリーマンなのであり、それではおかつ、モ衷邸めぐり」の写真のような立派な家に住めるのだから、我々特権者ふせいのあいだ口はふさがることはないだろう。一つ面白い計算を試みよう。

ホテル「新橋」のもうけぶり

泊夫婦の持ちドヤ五軒は五軒とも一層個室がほとんどで、しかも大きなところばかりだから、仮に、五軒で千人は泊まれるものとしよう。一年中満室には絶対にあらずから、

七割の七百人が泊まり、一人三百円のドヤ代を払うとする。水あけはいくらになるか。

一日で二一万円。一月で六百三十万円。一年で七千六百六十五万円になる。もちろんこれは水揚げだから、必要経費へ人件費、電気代、そして固定資産税など不動産を持つてゐるだけであられる税金を引いても三千万や四千万の莫収入がはいという方がおかしいだろう。

三九年頃、つまりやれオリンピックだ新幹線だといつていた頃の金ヶ崎は、とにかくドヤが一軒で、金をもつてたま青カンをけざるを得なかつた體の節である。泊のがめつた典型例的に示しているドヤにホテル「新橋」がある。

新橋は、千成ホテルと同じで、登記簿上は三階建てになつてゐるが、実際は一部七階の六階建てになつてゐる。つまり我々がいう「フリ天井」を、途中からか、最初からか、つけて一階を二階に分けてある。そして七階建

けや。」

「活版刷りの方は、雇ひ出してある方やからそのまま水揚げになるけど、未雇ひの二階、四階、六階、七階の方は、実際泊まつても泊まつてないことになるから、全然税務署に申告せんでもええわけや。当時やからえらい収入やつたと思うぞ。全部泊のものやもんな。」

新橋は「リムズ」

この道は、がめついたりにはなかなかな小作者なのである。女房の和子には全然頭が上がらないから面白い。この二人が結婚する時の話、当時一族の間でもちざりになつてゐた。

結婚前、和子は藤田本通にあつた洋風屋の娘でファッションモデルをしていた。これにぞつこん、とにかくバタホレしてしまつたのは過であつた。泊は和子の家に「嫁にくれ」と目撃したが、親がなかなかウンと言わない。

ホテル「新橋」

「リムズ」

こういう違法建築は、違法だからこそもうけも多いのである。再度、元ドヤの管理人Kさんに御登場願おう。

「三九年頃は一番活気のおつた頃やから新橋も空室なんて全然なかつた。藤田（即ち屋敷）の宿泊人名簿が二通りあって、一枚は活版刷りでもう一枚はカリ刷りでできた。ちゃんと役所に届けでる一階、三階、五階の分だけ活版刷りになつてゐるわ

やつこのことで、大阪でいう「こしらえるとりへ焼入道具」一切を男の方が用意する」という条件で口説き落すことができたのである。その時に、立派な家も建てるからという条件もあったが、その家が現在の家であるという確証はできていない。話によるとトラックの台——えんえんと続く花城道具は、近所でも当時ものすごい話のタネになったという。さて、今ではどうだろうか。

金を逃げて 近所ともつきあわず

平野区にある自宅の近所の奥さん（三十五才くらい）に話を聞いてみた。こちらが「あぞこの山田さんのことについてお尋ねしたいんですけれど」と聞いただけなのに反応は実に早かった。

「あやあぞこの人はカズミ町のドヤをよつけもつたはる人でしょ。この前必事やつたこともそうでしょ。」

はかなが近所では評判らしく、西遊関係の

なり千成ホテルまでその持ちドヤのようにうわさされているフシもうかがえる。ただ、何も言わないのにこのお奥さんが、カズミ町のドヤ」と自分から言い出したのには驚いた。そして高く長い髭を指さして、

「なんせあの端ですよ。近所づきあいはありません。私ら全然ですわ。おじいさんが最近かなりはつたらしいですよ。あぞこの家はいろいroyやこしいらしいネ。」

近所ではずい分反感をもたれていることは間違いない。長男長女（現在一七才と一五才）には二人に十二人という家庭教師をつけていたとも聞き、とにかくこの夫婦のまわりにはろくな話が転がっていないかった。

前号のふろ特集ではないが、金とかかはたまるほどきかない。各地を歩くのがこの人達のようなのである。

